眺望

高速のエレベーターで上りつめた階に開けていた眺望には
何ものかが欠けている

市民たちがそこに見える街で生きていた———
それにもかかわらず、何ものかが欠けている

びっしりと張り付いた２階家
ぽつぽつと突き出たオフィスビル

平板であり、自明である
直線であり、数学的曲線である

そこには個人的な安穏があり
あるいは猟奇的な犯罪がある

有機的に張り巡らされている筈の
ライフラインや通信ネットワークがある

それらは血管であり、神経組織である
すなわち、細胞であり、生命であるはず———

論理的に導き出された定理によって
フーガのように構築された都市

それらは、ひたすら食べることによって
拡大成長を行いうる間のみ生きている

しかし、ほんの少しでも停滞しようものなら
飢餓に喘ぎ、喉を掻き毟ることになる

既に私たちは飢えはじめ
己自身を消費するしかなくなりつつあるのだ

壁に耳を当てると聞こえるのは
残飯に飽いたネズミどもが電線を齧る音

眼下に見渡すこの街のあちこちで
不要となった事物が朽ち始めている

人々は、なけなしの貯金をはたき
浸食を食い止めようと真面目に考えている

一台のトレーラーが突然クラッシュする
その理由は、決して疲労の果ての居眠りではないのだ

ああ、バッハならばこれをフーガに仕上げるだろう
次々と声部を失ってゆく退行的なフーガとして

もはやこの眺望も見るに堪えないものとなっている
2度とこのエレベーターを上ることもない

(2011.7.10)